

あゆみ通信

VOL. 174

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

親鸞のことば

「南無阿弥陀仏」
という、ひとすじの道

念仏者は無碍の
一道なり 「歎異抄」

この言葉は、「念仏者は、なにものにも妨げられない、さとりへのひとすじの道を歩む者である」という意味です。無碍とは、なにものにもさまたげられないということです。

私たちの現実、老病死の苦、愛する人と別れなければならない苦、嫌いな人と会わねばならない苦、欲しいものが手に入らない苦など、さまざまなさまたげであふれています。親鸞の人生も、幼い時の両親との死別、流罪、長男の義絶など、決して順風なものではありませんでした。しかし、親鸞は念仏ひとすじに生きる道を大切に、それらのさまたげと向きあい、超えていきました。念仏という阿弥陀さまのはたらきが、現実と向き合う力になったのです。

(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

一日の空過

四季の季節の移り変わりに戸惑っているのは、僕だけでしょうか。寒い冬が長く続いたその後は、本当は色とりどりの花が咲き乱れる春が来て楽しむはずが、すぐに暑い夏が、それもめっぽう暑い連日35度が当たり前の日々が、長い間続いて、やっと来た秋が、紅葉が暑くて咲き乱れることなく、また、とことん寒い冬を迎えると言う、地球の周期が変った気がしませんか。

それでも、この一年余り、リハビリに通う農道のそばの畑では、いつの間にか育った稲の穂が実が入り頭を下げていました。その間に、自分は日々の生活に追われて、気が付かずに報恩講さんを迎えます。

金子大榮先生の「一日の空過は、やがて一生の空過となる」と言う言葉が思い出されます。この1年を、空過少なくしたいのちを生きるために、聞法第一しかならないような気がします。お仲間と共に、一步一步歩むことにしましょう。

合掌 (本)

聞思ひとつ

三重教区慶法寺 藤井慈等

(前略) ところで真宗本廟の報恩講が始まった昨年(2008年)の11月21日、かねて療養中であつた宮城顕先生がお亡くなりになり、一周忌を迎えます。その宮城先生がお元気であったころ、宮城先生が師と仰がれた安田理深先生の一周忌を迎えての聞法会で、安田先生についてお話がありました。それは



故宮城顕先生



故安田理深先生

は「(安田理深先生が)ご講義の最初に、やはりあらためて聞思する以外に道が無いのであります。そしてまた、野心を捨て

て聞思することです、そこに本当に意味の創造がある」と曾我量深先生が亡くなられた事実を受け止められて、繰り返し聞思する以外にないとおっしゃっておられる」と言うことを取り上げていただきました。

そして、宮城先生は「本当に私たちは遇うと言うこともですね、遇いづめに遇いながら遇うておらんというのが、私たちの日々でございますけれども、同様になかなか本当に、すでにその先生が死なれておりながら、先生を失ったと言うことの意味も最後の最後まで、やはり身に痛く響いてこないという、そういうまさにどうしようもない鈍感さと言うことを思うんでございます」とおっしゃっています。そして「野心を捨て



曾我量深先生のことまで考えて行動せねばならぬ。[] 宮城 賢

てて聞思する」という言葉を、改めて「静かに聞思する」という言葉で受け止め直されています。

「野心を捨てる」ということを、「静かに」という表現に変えてあります。その「静」ということを、「知恩」、恩を知ると言うことであり、それが人間存在の根っこであると教えてくださったのも宮城先生です。まさに根っこを失う生き方が、「木石」であり、「どうしようもない鈍感さ」なのだと思います。

報恩講は、そのような私どもに、聞思一つを呼びかける悲願の歴史の姿であることを想わずにはおれません。

(「真宗の生活」2013年より)

第2組報恩講

今年最後の第2組仏事です。ご都合のつく方はぜひご参加ください。

日時 11月8日(水) 17:00
会場 即應寺(阿倍野区阪南町)
内容 お勤めと法話、懇親会
と同朋総会

講題 報恩とは？一恩に報いる、恩を報せる一
講師 戸次公正先生

(第22組 南溟寺住職)

会費 2000円(お斎料)

第2組聞法会が開催

去る8月26日(土)午後2時から、天王寺区の

光照寺(墨林浩住職)を会場に、第2組聞法会が開催され、組内の住職や坊守、門徒や推進員等

26名が参加しました。当日の講師は、お馴染みの第17組法観寺住職の廣瀬俊先生です。

墨林組長の開会。まず、墨林住職による調声でお勤めをし、続いて廣瀬先生のご法話



に移りました。

廣瀬先生の法話聞書

細川克彦(佛足寺)

はじめに先生は、今年は親鸞聖人御誕生850年と言うことで、ご生涯の様々な出来事を通して、親鸞聖人も求められた「ほんとうに生きる」と言うことを尋ねていきたいと話されました。

「ほんとうに生きたい」と言う言葉は、今の私たちにも深いところから起こっている問いではないだろうか。

ある15歳の少女の言葉「お金でも品物でもない、何かが欲しいのです」という叫び、また年老いた女性の言葉「暮らしは不自由ではなかったが、ほんとうに生きたことはなかった」と言う言葉。

親鸞聖人もご生涯を通して、ほんとうの仏教、ほんとうの救い、ほんとうの教えは何処にあるのだろうかと思われたのではないかと。

そして29歳になって、京都六角堂に参籠された時、救世観音の「結婚妻帯の道を行くしかないのなら、私が美しい女性の姿となって妻となり、一生の間連れ添って、臨終の時には極楽に導いてあげましょう」と言う夢告を得られたことがきっかけとなって、法然上人の元を訪ねられたと。

恵信尼様のお手紙には、法



然上人は「善き人にも悪しきにも、同じように、生死出べきみちをば、ただ

一筋に仰せられ候いし」とあり、『正明伝』ではその時、親鸞聖人は感動のあまり子どものように泣かれたと伝えられていると。

休憩後は、2011年の法然上人800年大遠忌法然共生イメージソング、さだまさし作詞・作曲による「いのちの理由」

の歌を聞かせていただいた。その歌詞の中で「私が生まれて

来た訳は/父と母とに出会うため/私が生まれて来た訳は/(中略)愛しいあなたに出会うため/(中略)しあわせになるために/誰もが生まれて来たんだよ/(後略)と歌われている。

先生は「誰もが生まれて来た」と言うことは、法然上人の「善き人にも悪しきにも」の意味であり、「しあわせになるために」とは、生死出ず



べき」、すなわち、善し悪しと言って比べたり、そのために苦しんだりする日暮らしを離れたところに、「しあわせ」になれると言う意味があると具体的に、分かりやすく話してくださいました。

門徒会と合同研修会



2023年9月8日(金) 午後1時30分から天王寺区の光照寺(墨林浩住職)をお借りして、第2組門徒会との合同研修会を持ち、門徒11名と墨林浩組長をはじめ、池田英二郎副組長(宗恩寺)や喜左上恵子住職(紹隆寺)のご参加をいただきました。講師は昨年に続き門真市中心願寺の松井聰先生に御出講いただきました。

真宗宗歌で開会、中嶋ひろみ門徒会会長(光照寺)、墨林浩組長からご挨拶のあと、松

大推協公開講座

日時 12月6日(水) 14:00~

会場 難波別院同朋会館講堂

講題 南無阿弥陀仏一人と生まれたことの意味をたずねていこう。みんなに願いかかけられている

講師 澤田見先生(12組清澤寺)

参加費 無料



井先生から「人間成就」という講題でお話いただきました。「人間成就」言うなら、本当の人間になるということ。これを受けて「この私とはいったい何であるか」と言うことになりませんが、この問いの明確に応えられているのが、

『観無量寿経』にある「王舎

城の悲劇」の物語で、お釈迦さまが韋提希夫人に



対して言われた「汝はこれ凡夫なり。心想羸劣していまだ天眼を得ず、遠く観ることあたわず。諸仏如来は異の方便ましまして、汝をして観ることを得しめたまう」の言葉です。

そして「凡夫」について、道綽禅師や源信僧都、親鸞聖人の「一生造悪」「極重悪人」「煩惱具足」の言葉を引きながら、私たちが生きると言うのは「罪惡深重の身である」と言うことを話していただきました。そして、人間成就の道は、南無阿弥陀仏の教えしか無いですねと話されました。

(松井先生の法話要約は次号で)

宗祖親鸞聖人御生誕850年・立教開宗

800年慶讃法要テーマ

南無阿弥陀仏一人と生まれたことの意味をたずねていこう

みんなに願いかかけられている